

Z世代と接して思うこと

むろだて いさお
室館 勲

(株式会社 潮流社
代表取締役社長)

人材育成に携わるようになってから33年が経ちますが、各方面の経営者やリーダーから相談を受ける機会が増えました。特にここ最近は「Z世代の若者とのコミュニケーションや育成方法に戸惑っている」という声をよく耳にします。

結論から申し上げますと、大切なことは「入社3年から5年の間で、将来は会社の社長や幹部になる」という意欲を持たせられるかどうかだと思います。まだ仕事を覚えきっていないうちから、勉強のためにとネットやテレビの経済番組、本などで上手くいっている企業の実例を蓄積していく20代の若者を、たくさん見てきました。私も『カンブリア宮殿』や『ガイアの夜明け』を視聴して大変勉強させてもらっ

ていますが、自分の会社に対して誇りも自信も確立されていないにも関わらず、毎週のように成功事例ばかり勉強していると、しだいに自分の会社の至らない点と比べて自己憐憫に陥ってしまうのかもしれないと、冷静に考えるとテレビ番組は制作会社がセンセーショナルな内容にするために、必死に注目企業を見つけ出し、その企業の良いところを切り取って放送しているのです。放送された企業の5年前や10年前、5年後や10年後を考えると、最高の状態を常に維持している企業がどれほどあるでしょうか。是正勧告や業務改善命令を受けている企業もあるでしょう。テレビで取り上げられたからといって、絶対に不祥事が起こらないと言い切ることもできません。

若手社員には、経営者または事業責任者が自社の文化や魅力をいかに叩き込んでいけるかが、大切になると思います。そのような教育を受けて軸や意識が固まったうえで、さまざまな企業の成功事例を学ぶことはとても意味のあることだと思います。

数学者の藤原正彦氏は、小学生にとって大切な教育は1に国語、2に国語、3、4は無くて5に算数とよく仰っていて、数学者にも関わらず最も大切なのは国語教育だと言いつつ切っています。最近では英語教育に力を入れる風潮がありますが、日本語

もままならない小学校低学年のうちに英語を教えようとするのは、ズレた教育だと思えます。

明治維新後、岩倉使節団の一員としてアメリカ留学した、当時6歳の津田梅子や11歳の山川（後の大山）捨松が、11年後に帰国した際に日本語を忘れていた話は有名です。彼女たちは逆境をバネにして後世に残す功績を挙げましたが、多くの人は軸が固まらず一生を終えることでしょう。国語教育によって日本人としての情緒という軸をしつかり固めるからこそ、数学や英語の勉強に価値が増すと思います。

現代に話を戻すと、5月病という言葉があります。大学生は徐々に学校に行かなくなり、社会人もモチベーションが下がっていくそうです。なぜそのような現象が起こってしまうかという点、ゴールデンウィークに入ると高校や大学時代の仲間会って現状を話したりするからだだと思います。新たな生活はまだ始まったばかりで比べる時期ではないにも関わらず、仲間の話を聞いて少しでも自分より待遇が良かったりすると自分を惨めに感じてモチベーションが下がってしまうのです。

また、最近はSNSが非常に盛んですが、SNSで他人の投稿を見ている時間が長いほど幸福度が低いという話が、以前よりも広まってきました。加工された写真

や楽しそうに見えるように撮影された写真と自分の現状を比べたら、どうしても劣っていると感じるのでしょう。社会人として技術や経験を積み重ねなければいけない時期に、SNSばかり見ていたら幸福度が下がるというのはうなずける話です。

リスクリングやキャリアアップという言葉が流行っていますが、私から見るとただ勝ち馬に乗っているだけのように見える若者が非常に多いです。自分のためだけにスキルを身につけ、会社の調子が悪くなると切り捨てて、より条件の良いところに転職することが本当にキャリアアップと言えるのでしょうか。私から見ると軸を持ち、辞めていった人間の穴を必死に埋めようと努力しているほうが断然かっこいいと思います。

Z世代との接し方に悩みを抱えているのであれば、まずはこの価値観を伝えてあげることが大切だと思います。若者に限らず勉強熱心なことはとても良いことです。他社の研究ばかりするのではなく、所属する組織の存在意義や自社商品を理解し、目の前の仕事を覚えて根を張ることが重要だと思います。軸が固まった人間がテレビを見たり本を読んだりすれば、さらに明るい未来を切り拓いていくことができます。

